

発展途上国の政治と社会



南米の政治と社会



担当：浜中新吾

はじめに：南米の概観

- 地理的にはメキシコから南米大陸南端まで
- 33の独立国
- 約5億人のひとびとが住む
- 歴史的・文化的な共通性が高い

南米諸国の共通性と多様性

- ほとんどが19世紀初頭に独立
- 宗教的にはカトリック
- 何らかの形でスペイン的伝統が残る
- 多くの国でスペイン語が公用語
- 人種的構成は国によって多様(白人・先住民・黒人・混血・アジア系)
- 経済発展の度合いも国によって異なる

南米地域の特徴

- 社会・経済的な特徴

- 一般的に貧富の格差が大きい

- 政治的な特徴

- 民主主義の伝統の欠如に伴う諸問題、例えば政治的安定度の低さ、がある。

南米の時代区分

- (1) 1492－1810年ごろ
 - スペイン植民地時代
- (2) 1810－1870年ごろ
 - カウディーリョ(統領)時代
- (3) 1870－1929年ごろ
 - 一次産品輸出経済体制期
- (4) 1930－1980年代前半
 - 輸入代替工業化の進展とその行き詰まり
- ***(5) 1980年代以降: 新自由主義経済***

植民地時代の遺制

■ <中南米>

- 1492年から植民開始
- 初期は「征服者」個人が入植
- 金銀採掘、栄光、異教徒の制服が動機
- 中世ヨーロッパの封建思想が移植される
- 先住民は労働力として社会の底辺へ

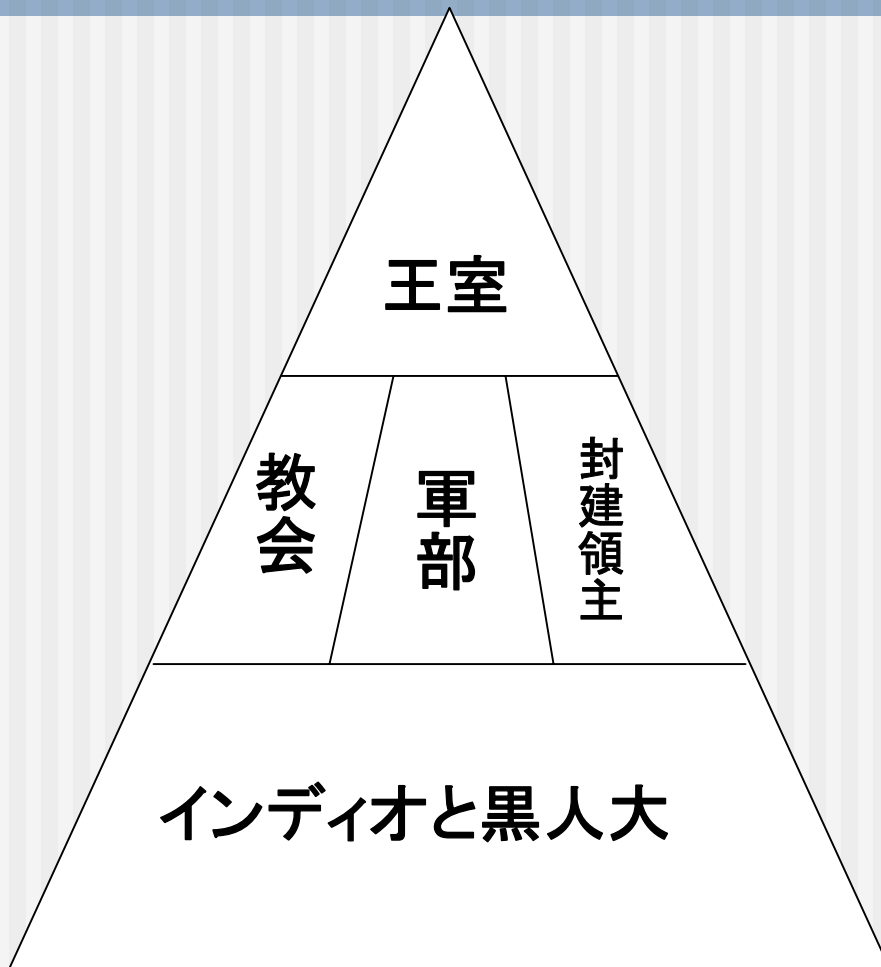
■ <北米>

- 1620年から植民開始
- 初期は清教徒の家族が移住
- 信仰の自由が移住の動機
- イギリス近代民主主義思想が移植される
- 先住民は白人社会から隔離・排除

スペイン植民地時代の特徴

- 本国から派遣されたスペイン国王の代理である「副王」が統治した
- 副王には三権が集中していた
- 垂直的な統治機構が形成された
- 植民地の土地は王室の所有（私有の禁止）
- 無敵艦隊が敗北してから、本国の王室財政が傾き、植民地の土地私有が認められた
- その結果、大土地所有制が確立

18世紀 中南米の政治社会構造



政治思想と中南米の政治社会

- ほとんどの南米諸国は1810年代にスペインから独立した
- 思想的に最も大きな影響があったのは、ヨーロッパの啓蒙思想
- アメリカ独立革命、フランス革命が先例
- ルソーの社会契約論、フランス人権宣言などが南米のエリート層に浸透した
- 独立した南米諸国の憲法に「三権分立」が盛り込まれる

19世紀の中南米外交

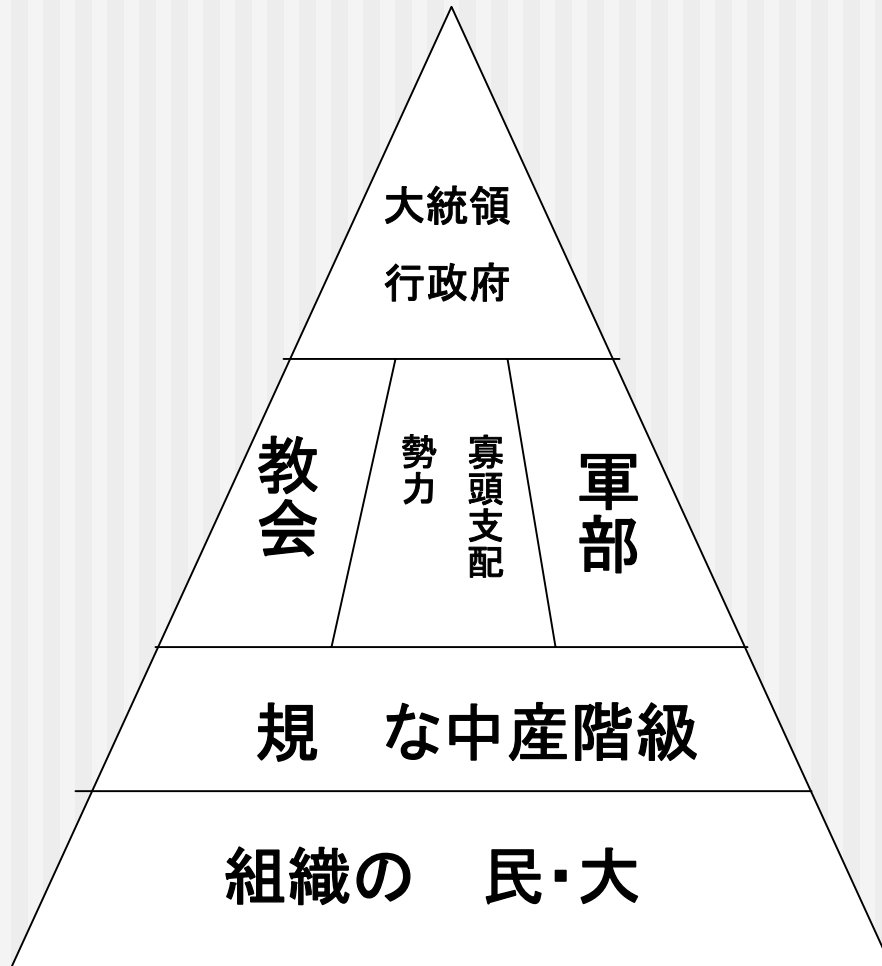
- モンロー宣言とアメリカの孤立主義
- カリブ海への関心とキューバ支配の萌芽
- 米墨戦争とメキシコ外交
 - 19世紀のメキシコは現在の米国南部・中西部・西部に広がっており、テキサスはメキシコの一部
 - テキサスに移住した米国市民がメキシコ政府と対立し、独立運動を開始（後に米国に併合）
- 対米コンプレックスのくびき

米西戦争とキューバ

- グアantanamo基地
- ホセ・マルティらが独立戦争を開始する
- アメリカがスペインとの戦争に介入
- 以後、キューバ革命までアメリカの政治的、経済的影響が及ぶ
- プラット修正条項という内政干渉権



19世紀 の中南米の政治社会構造



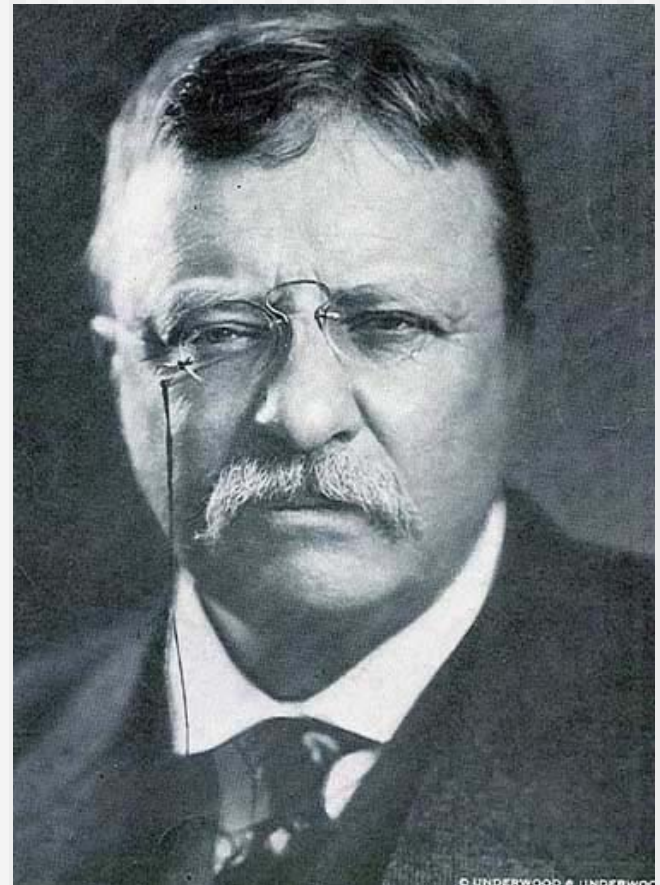
パナマ運河建設

- コロンビアからパナマが独立
- 独立の影にアメリカ
- 運河条約の締結
- アメリカが永久租借
- パナマ国民の反米ナショナリズムを刺激
- 1999年にようやくパナマに運河が返還される



棍棒外交とラテンアメリカ民族主義

- 中米・カリブ地域の秩序維持と安定のために米国が果たす役割を宣言（棍棒外交）
- 1930年代まで米国の干渉政策が続く
- 「米国の裏庭」
- ナショナリズムを刺激
- マルティ思想は革命につながる



中南米のナショナリズム

- ペルーのアヤ・デラトーレは反帝国主義と民族主義的社會主義を標榜する「アプラ」を結成
- ニカラグアではサンディーノがサンディニスタ民族解放戦線を組織して反米ゲリラ闘争を展開



世界恐慌と善隣外交

- 世界恐慌は南米政治・経済・国際関係の転換点
- 一次産品輸出の急激な低下
- 外貨収入を激減させる
- 南米諸国の輸入能力も著しく低下
- フランクリン・ローズベルト米大統領は中南米で「善隣外交」を展開

ポピュリズム体制と工業化

- ブラジル、アルゼンチン、メキシコといった比較的近代化が進んでいた国家で成立
- 輸入代替工業化政策
- 国家主導の工業化
- 工業労働者を保護
- 労働組合を国家が組織し、政権の支持基盤とする

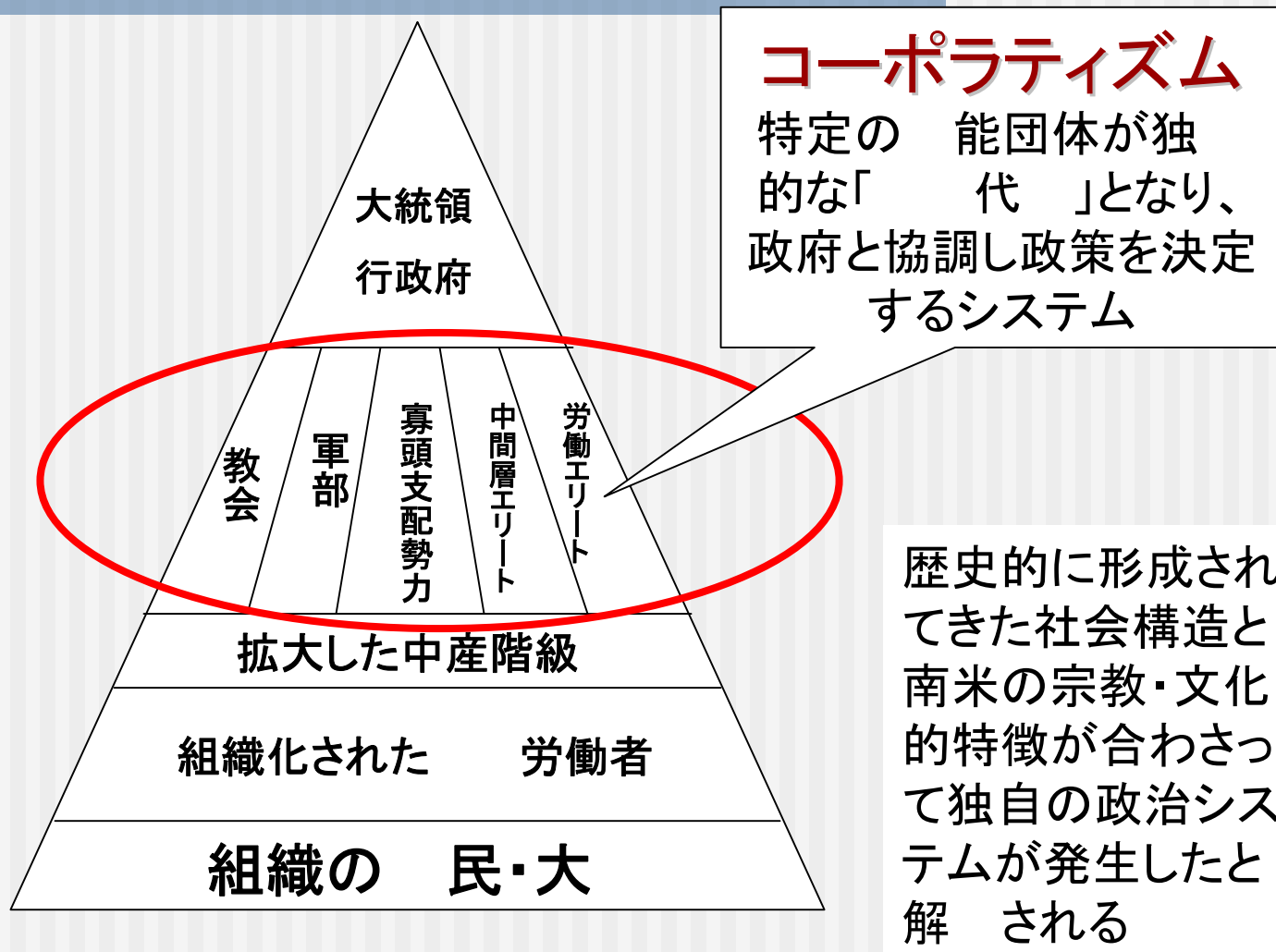


ポピュリズム体制と工業化

- 外国資本と結びついて
いた寡頭支配勢力の
政治的権威は低下
- 新興の産業資本家層
の力が強まる
- 中間層も政権を支持
- 多階級の連帯
- 民族主義的政策



1930年 の中南米の政治社会構造



キューバ革命(1959年)

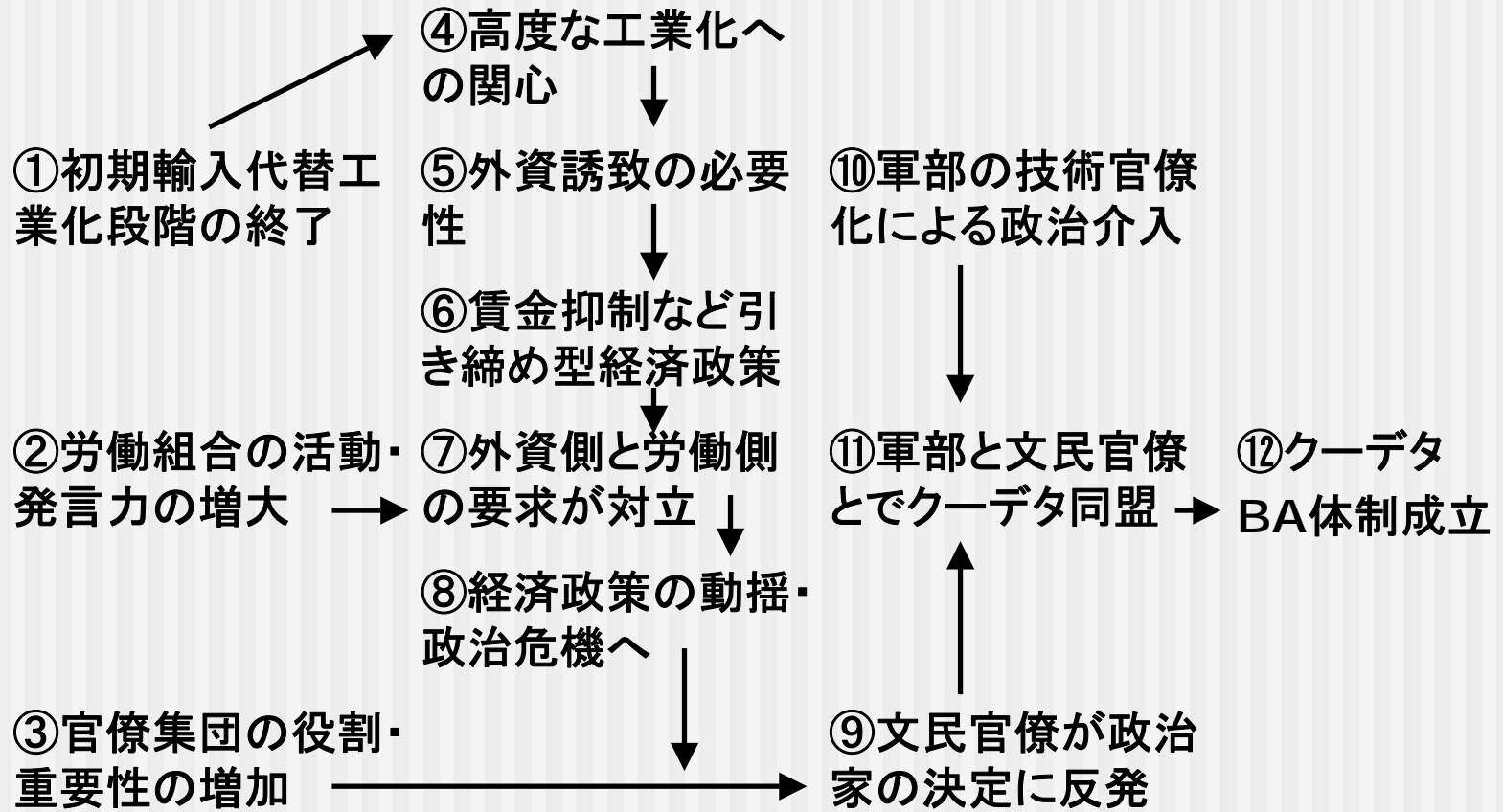
- カストロを指導者とする革命政権が樹立
- 社会主義革命宣言
- 米州機構の内側で起こった革命にアメリカは動揺する
- 「内部の敵」を取り締まる⇒南米各国で軍政が敷かれる



長期軍事政権の時代

- 左翼運動の活発化と軍の影響力の増大
- 「国家安全保障ドクトリン」
 - 安全保障のために政治的安定・社会的統合・経済的发展を必要とする
- ブラジル・アルゼンチン・チリといった近代化を経験した社会で軍事クーデタが発生する
- 官僚的権威主義体制へ

官僚的権威主義体制の成立



冷戦構造と中米紛争

- ニカラグアで革命政権が樹立
- 右翼ゲリラが武装闘争を開始
- エルサルバドルでも政府軍と左翼ゲリラとの戦闘が激化
- 冷戦の代理戦争
- 国際構造の変化によって紛争が収束

図表 1.5 中米における内戦の影響（1980－89）

	内戦の期間（年）	国外・国内強制移民数（人）	軍人・民間人の死亡者数（人）	直接的間接的損失額（10億USドル）
エルサルバドル	12	458,600	70,000	1.076
グアテマラ	36	—	—	—
ニカラグア	11	487,100	45,000	2.520

出所：Crosby (1990), "Central America."

図表 1.6 1980年代の一人当たりGDPの累積変化率

	1981-1990
コスタリカ	-15.0%
エルサルバドル	-15.3%
グアテマラ	-18.0%
ホンジュラス	-14.2%
ニカラグア	-40.8%
中米全体	-17.2%

出所：CEPAL(1990), "Evolucion de la Economia centroamericana."

出典：国際協力銀行(2003)『中米諸国の開発戦略』13頁。

民主化「第三の波」

- オイルダラーが南米の資金需要に投資
- 累積債務危機⇒民主化
- (1) 開発政策の破綻
- (2) 「政治的」学習の効果
- (3) カトリック教会の変化・・・「開放の神学」
- (4) 軍事政権の人権侵害に対する批判
- (5) 冷戦構造の終焉

1990年代の新自由主義政策

- 「失われた10年」
 - 輸入代替工業化政策の失敗
 - 国営企業の赤字・肥大化した公務員組織
 - 累積債務の増大から経済危機へ
- 経済に対する政府の介入を否定
- IMFの指導下で構造調整を行う
 - 民営化・規制緩和・補助金削減・人員整理

反動としての左派政権の台頭

- 新自由主義政策はマクロ経済指標を好転させた
- しかし所得格差の拡大、中間層以下の生活水準悪化、治安の悪化を招いた
- 経済成長より再配分を重視する左派政権が台頭
- ベネズエラ、ブラジル、ボリビア

